

新編水滸畫傳

四編

875  
40



門 875  
卷 40

新編水滸畫傳卷之四拾

東武 高井蘭山翁 譚編

明治三十二年  
十一月一日

○錦豹子小徑ゆく戴宗に逢

戴宗偏に蘄州と志し沂水縣ふかやま行處に遙う對面より一人の漢子來りるるが戴宗の走ると疾きと見て則ち呼んで云く神行太保何よの往や戴宗あまを聞て忙しく頭と擡て此人を見りて頭圓く耳太く鼻直うして口方の眉清く目秀て相貌しつて文雅なり此時戴宗問くいつく某うつく豪傑の尊顔と識認すいつんぞ我名と呼ぶや彼漢子答ていつく足下へ果して神行太保うてまうまうとて忽ち地に跪て禮とあり戴宗急に礼と回して云足下の高姓大名いつらん彼漢子答て某姓の場名ハ林緯名ハ錦豹子と云

數月以前に道中の酒店に於て公孫勝先生に遇。梁山泊の晁宗西公  
今専ら賢と招き士と納りしと云ふ事と兼り。某も山陣に身と倚んと  
願ひし處に公孫先生一封の書簡と修へ。某と山陣に薦りし  
然れども某猶未だ山陣に趣は其ゆゑに至りしも只山陣に何事か  
掛礙あつ。某と苗ゆきと云ふ事と思はれてあり。彼日公孫先生諸の豪  
傑の事と語りしひ一時足下のこととも詳に聞る。一日の内に八百  
里の路と行ふとあり。某今足下の路と行ふと云ふ尋常の人  
の及ぶ所にあらず。若し神行太保と云ふ人もあらんやと思ひ敢て  
大名と呼ぶるに果して長兄の光信あり。某莫太の幸ひに戴宗が  
云。則ち彼公孫先生蘄州に廻りてより以來曾て消息あるを。晁宗  
西頭領朝夕あると渴望。則ち今某と蘄州に遣はして公孫先生と

訪へし。早速誘引して山陣に歸るべきとあり。あまに依て某今  
命と奉て今日あつて至り。想は手足下に見えし。奚啻雀躍の如  
らんや。揚林が云某へ本彰徳府の産なり。と云ふも。蘄州の地ふ於  
し知らざると云ふ。若し長兄我と云ふ。某あて同往す。若し  
戴宗が云足下敢て同行し。某何より。の幸ひあり。若し公孫先  
生の尋ね遇あべ。三人早速山陣に回る。揚林の事と聞て大いに  
悦び。則ち戴宗と拜して。兄弟の義と結び。其夜すて旅宿と求  
て。歇し。揚林自ら酒肴と具へ。戴宗と款待す。翌朝未明  
に兩人已に旅宿と出て路に臨む。揚林戴宗と對して云。長  
兄へ神行の法と行ふ。一日の内に八百里の路と行ふ。某あ  
は。長兄に従ふ。某は必定數日後。蘄州に至る。戴宗打笑

云我此神行の法ハ又よく賢弟と走らむ乃ち四ツの甲馬と分つて  
二ハ汝の腿に挂著同じく神行の法とあして走る時ハ我とぞのれに併しく  
快し。若然らば汝のうんぞよく我に追付んや揚林大に悦び頓て二ツ  
の甲馬と双の腿に挂著し處に戴宗遂に神行の法と行ゆく馳ゆと  
し。二人宛も空と飛ぐてくまやツの高山と望まぬ揚林云  
此所ハ飲馬川と云地ある。山中ハ原來強盜の頭領あつて若干の人  
馬山陣と守る。只知らば頃日ハいづらや。戴宗あまを聞て云  
此山の勢ハ極く猛悪あり。頃日くうもなまらる人馬のあつてんと  
未ど云も終らざるに忽ち金鼓の声大ひ響て二三百の小賊馳出  
當先に二人の頭領各刀と揮て大音声呼らる。汝二人ハ何  
者あると速に路と買て過る。揚林呵々と打笑く云く。汝

あく路と賣む我鋒とと以て買べとて刀と輪斬てかば  
二人の頭領忽ち地上に跪き。揚林長兄みてハあつてやと呼らる  
し。揚林あまを見く大悦び急に扶け起して礼と還し。則  
戴宗と請て見えし。戴宗問て云此豪傑ハ誰あま。賢弟と見  
知りぬるや。揚林答て云我と識認する豪傑ハ原蓋天軍襄陽府  
の人。姓ハ鄧名ハ飛。諱名ハ火眼。狻猊と号す。我と彼やハ  
兄弟の義と結び多年一所に在り。五十年前別て後々  
うつく音耗も通せざり。想まば今日此處あつて泰會するこ  
と。縁の絶ざる處あり。鄧飛も又揚林ハ戴宗グと問て云彼長  
兄ハ誰あるや。必定寺閑の人ハあつて。揚林云此長兄ハ是梁山  
泊の英雄神行太保戴宗と云人あり。鄧飛是と聞て忽ち拜

石秀義勇  
懲惡徒們



伏して云某久々大名を閑及びびつるの今日何の幸いや尊顔  
 と拜と戴宗重く鄧飛に問て云彼豪傑ハ亦何人ぞや鄧飛答  
 へ云彼ハ我ガ義弟孟康と云者あり。原真定州の産うて。諱  
 名と玉幡竿と号ハ戴宗是と閑く。大ハ不悦び四人同く閑談  
 良久く後揚林又二人の頭領ハ問て云汝兩賢弟此山に  
 安身するも幾年と経るや鄧飛ガつら我ガ輩此山に來つて  
 一年餘りあり。此半年以前ハ又一人の豪傑と得ぬ此豪傑ハ原  
 京兆府の人なり。姓ハ裴名ハ宣とヤ。昔日六案孔目とあせり人  
 あり。最能鎗と拵り棒と使ひ劍と舞し刀と揮ふ其人とあり忠直  
 として一點も邪の心あり。あまのよる人皆鉄面孔目と諱名せり  
 向に當府の知府ハ無實の罪ハ陷され乃ち沙門島に流されんと

して此所と過りくるゆゑ我ら兩人山と下つて。監押の下官兩  
 人と斬殺し。遂に裴宣と苗山陣に在り。凡二三百の人馬と  
 聚て共に此山と守り。年長くふよつて。山陣の主と裴宣ハ讓  
 りぬ。願くハ兩長兄片時山陣に上りまひ。裴宣も遇て戴宗  
 揚林大ハ悦び頓く兩頭領に隨つて山陣に上りくる。時に裴宣出  
 迎へて。聚義廳に至り。各礼畢て坐己に定り。所ハ頓て酒宴  
 と進め盃と飛せ酒數巡に及びるれ。戴宗先晁蓋宋江が今專  
 ら賢と招き士と納め。天下の豪傑と義に聚ることを告裴宣ら  
 三人とも梁山泊に招きくるに裴宣ら三人是と閑晁宋兩人が徳を  
 感ど乃ち戴宗に對して云くる。某が陣中にも亦二百餘りの人  
 馬あり。若長兄微賤と存するんぞ。某をいよく梁山泊ハ誘引く



名せり。此揚雄昔日河南と出て、此蕪州に至り。久々落魄て在るるが。今日知府に擡奉られ。西院の押牢節級とあり。ゆゑ牢中の下役人ども、此日樂と奏し。揚雄と迎へ且喜びと賀す。あり。此時又路の傍より二十餘人の大漢子出來る。其内の頭くる大漢子、踢殺羊張保と云者。あつて常に城中城外徘徊して専ら人と悩す。破落戸棟梁。此張保今揚雄が立身し。と見ておれと妨人と欲し。則ち諸人と推開て。揚雄が前に至り。節級恭喜。呼ぶ。揚雄急ふ答て云。某何ぞ長兄の賀に當らんや。只望らくは長兄某と共に去て一盃と酌。張保が云。我曾て酒は望あ。只汝に十貫文の錢と借人。揚雄が云。我頗る長兄の面と識認ぬ。といふも。未だ曾て錢財と相交へ。いづんぞ我に問て錢

と借人と云や。張保が云。汝今日百姓と悩して多くの禮物と求め何ぞ火一分て我に借ざるや。揚雄が云。我今日幸ひ西院押牢とあり。ゆゑ其樞機ある者ども。皆我に禮物と送る。我あに敢て民と悩してあるを求めんや。汝却て我を妨人と図らん。張保あまを問て大ひに怒り。彼六七人の漢子ども。下知して禮物と棄ひ取む。揚雄此光景と見て。汝何ぞ無礼とあり。ゆゑ己に馳向て打散さんとせし。處に彼張保早くも揚雄が背後に繞り出て。則ち揚雄と緊と抱き。又兩人の漢子來て揚雄が手足と搦。少くも働せざり。處に對面より又一人の大漢子。一荷の薪と挑て來り。張保が無礼とあり。と見て心中頗る憤り。頓て薪と斬して張保を問て云。汝は何ぞ押牢と妨るや。張保是と聞て大ひに罵つて云



汝匹夫分量相應の七食のあらうはして何ぞ妄りに閑事と問て多  
言と吐出すや彼大漢子大ひふ怒り忽ち足と飛せ張保と地上に  
踢倒し其外の漢子ら又東西ふ打倒しければ揚雄まらうに身と脱  
き則ち平生の手段と出して暫時の間に十人許打伏うり張保は  
まを見て取て敵せ彼禮物と棄ひ取らる漢子に跟て東の方逃  
走る揚雄益怒り急以後と慕らう追蒐ぬ彼大漢子ハ猶頼りの路  
上と繞て張保が手下の漢子どもと打伏うり戴宗揚林のあまを見  
て暗に彼大漢子と称美して云彼大漢子則ち人の人と欺と見てハ  
其弱き者と助け其強者と打よま真の豪傑ありとて戴宗揚  
林迫く前で云くるハ願くハ豪傑我輩兩人が言と容ひて彼らと饒  
しめんとして遂に彼漢子と引て酒店の内ふ入らま彼大漢子深く是

と謝しぬ戴宗が云我輩二人ハ過路の旅人あり今足下の猛勇と見ぬ  
るに恐らるハ彼らと打殺しまふとてやあらんと思ひ敢て足下と  
諫めく此所に誘引しぬ先宜く三盃とくまへ彼大漢子大ひ  
小謝して云兩位の長兄我と諫て禍いと免まらるまふのまあらま  
猶且酒と賜まらんとのま我豈あへく是に當らんや揚林が云四  
海の舟ハ皆兄弟あり何の關心うあらんとて遂に酒を求て彼大漢  
子に勧め酒己に數巡に至りぬ所ふ戴宗彼大漢子に問て云豪  
傑の高姓大名ハ何らん彼漢子が云某姓ハ石名ハ秀原金陵建康府  
の者ま幼き時より武藝と學びぬ若路次あり今日のごとき不平の  
ことと見る時ハ決して其弱き者と助け其強き者と打此ゆ多ふ人  
皆某と稱して拚命三郎とや今ハ此蘓州に落零て薪と賣く

宮守。戴宗が云足下のごとき豪傑此所こゝに流落ながれて之これを宮とせし  
まふこと又惜あはれか守まもりて。一錠ひとてんの銀ぎんと恵めぐりて。石秀固辞こゝろすること強あ  
て收おさめ足下願ねがへし此所こゝと去さて天下てんかに名なある豪傑かうかくらと義ぎと  
結び浮生ふせいと樂たのまへ石秀が云某ま頗すぶる武藝ぶげいと曉さとはることふして。つら  
ぞよく寸進すんじんと得えんや戴宗が云當世とうせいの天下てんか。朝廷てうてい不明ふみやして奸臣けんしん  
從横じゆうかうし。賢者けんしやの退あぎ小人せうじんの進しんむ我向われまにの事ことに因よりて梁山泊りやうざんぱくより晁せう  
宗そう兩頭領りうとうりやうの幕下まくかに属まして専せんら浮生ふせいと娛あそぶこと唯ただ朝廷てうていの御赦免ごじやめん  
を待まちのこと。若し一旦いつたん時節じせつ到來とらいせば忽まち官人くわんにんとももをまるべし石秀嘆なげド  
て云某まも久ひさく梁山泊りやうざんぱくに趣おもふこと思おもへども只恨ただうらままらまへま摠機しゆうきを  
して未まど行ゆむ戴宗が云豪傑かうかく若し梁山泊りやうざんぱくに行ゆんと思おもはれば某ま肯あく  
導みちべし石秀せきしゆうあまと関せき大だいひ小悦せうえつび先戴宗せんたいそうらり兩人りうにんに問とて云兩長兄りうちやうせいの

高姓かうせい大名だいめいのうん戴宗たいそうが云某ま姓せいの戴名たいめいへ宗そう此義弟こぎていの姓せいの揚名やうめいへ林  
と号ごうは石秀せきしゆうあまと関せきと云某ま曾そうて神行太保しんぎやうたうほと云大名だいめいと関せき及  
ろろろあろろ戴長兄たいちやうせいの事ことふあろろずや戴宗たいそうが云神行太保しんぎやうたうほとら  
則すなはち某まがことあり石秀せきしゆう忽まち拜伏はいふくして山陣さんじんに趣おもふことと高議かうぎ  
ろろ處ところの外面そとに餘多あまの人ひと尋ね來まりろろ三人さんにんの者ものあまと見みること則すなはち  
ちろの揚雄やうゆう二十餘人にじゅうよにんの土兵どへいと引ひて進しん入いる戴宗たいそう揚林密やうりんみつに想道きやうだう再  
び騒動そうどうさることとありやあろろと急いそに門外もんがいに馳出せしること石秀せきしゆうの自ら  
揚雄やうゆうと相迎あひむかへる云ろろ唯今ただいま押窄おしぢやくの何なにも多おほ此こゝふ至いたりろろひゆること揚  
雄やうゆう答こたへて云我方われがろ長兄ちやうせいと尋たづねひひね我先われさきに想おもへば張保ちやうほらの捉とらえれ  
己おのれに難義なんぎふ及および一處ひとところに幸さいひ足下そくかの助すけけと蒙まりて遂ついに彼かれらと追  
散ちろろろび礼物れいぶつ等ら尽つく取とりてぬ是則これすなはち足下そくかの賜たまひあり石秀せきしゆう

が云某先に兩人の旅客の邀らま。此所ろく三盃と酌し節級  
 今我と尋ふふし曾て存せし揚雄又問て云足下の高姓大名  
 へいう人石秀答て某姓の石名へ秀金陵建康府の者あり揚雄  
 重く問るる今足下と邀る酒と勧めらる人へ何まのあや石秀  
 が云彼兩人の今節級大勢と引來りまふと見て再び騷動するこ  
 めやあしんと思ひ遂に此所と避行ぬ揚雄が云己にかくのこ  
 んべ先彼らと皆歸すべしとて則ち人毎ふ二碗の酒と与へ歸  
 しくまふ衆人都く酒と飲て退散しる人揚雄又石秀に對し  
 て云ろろ足下此所ろく定め親類もあるまづね某と義と  
 結で兄弟の好くと誓ひる人石秀の事を関く大に悦び乃ちその  
 年と問るる揚雄の二十九歳石秀の二十八歳ありし則ち揚雄

と兄と石秀と弟と頓て天地と拜し兄弟の義と結びし  
 斯る處に揚雄が丈人潘公七八人の漢子と引く直ちの酒店め  
 内へ走し入揚雄忙しく迎へ問るる泰山此に來りまひて何  
 のこありや潘公が云我今汝が人と争とあしることを関し由  
 是と助んと欲く馳來りぬ揚雄が云此石秀と云人我と助け  
 彼張保と打し由多禮物等とく取回し彼らと四方へ追散し  
 ぬ此由多に我今石秀と義と結んぬ兄弟の約と誓ひぬ潘公が云  
 己にかくのこしんぞ我敢て石秀に三盃と勧めんとて頓て酒肉と  
 具へく石秀と款待潘公熟々石秀が英雄諸人の勝まると見  
 て則ち心中悦んぬ云かゝる豪傑若果して我婚と助けぬ公門  
 出入の人誰う敢く無礼とまはる者あしんやとて則ち石秀と愛

揚雄  
引石  
秀飯  
私亭

新編水滸畫傳卷之五



竹編水滸畫傳卷之五

揚雄  
石秀  
身結

敬ふて洩るる。三人遂に酒店と出くまへば石秀は又薪と荷  
て相従ひ直に揚雄が家ふ至りて處に妻出迎へて内に入らば揚  
雄則ち石秀と引く妻にまゝくむ。此妻の名を巧雲と云て初  
人の夫に嫁し居るも此夫死し居る由也。今又揚雄不嫁してま  
ど一年と経ざるとあり。石秀此妻を見て忙しく礼を行く。揚  
雄則ち兄弟の盟とむすびしことと妻を告此より石秀と家  
に苗て懇情殊更深かり。扱戴宗揚林兩人の揚雄が大勢と引く  
來りぬると見ゆ。若まて禍と引出すともやあらんとして急に城外  
み出く旅宿に歸り。翌日又公孫勝とてづひしうども曾て消息成  
知る人あらざりし。兩人暗に商議して云城中城外遍く尋られ  
ども曾て消息成らば此上の先梁山泊に回りて他日又來べしと。

其日蕪州と出く再び飲馬川の山陣に至りし。裴宣鄧飛  
孟康ら三人己の用意と調一行三百餘りの軍馬と官軍の軍  
行に詐り扮作星夜ふ馳く梁山泊と望て急ぎ入り。戴宗公孫勝  
不遇すといへども四人の豪傑三百餘の軍馬と得く。梁山泊一  
分の光りと添ると云つべし。扱又一日揚雄が丈人潘公揚雄と石  
秀とと呼んぐ云く。我家後門の外に一條の断路小街あり。一  
又一間の空房あり。此所井水も便よく聊も諸用差つるのあま地  
をれば我石秀と商量て彼空屋と修理し。大に店と開き石秀  
と此家に移し。商賣とせしめんと欲す。此といふ有べきや揚雄  
が云石秀是まで薪と荷く。營々せしめ。頗る勞煩の業あり。泰  
山今居あぐらの産業とせしめんとあらん。大に可あらん石秀は

新編大時...

嫌へどもんば我何ぞ別に意あらんあつべ賢弟のいふ思ふや石秀が云  
 我多く潘公の厚意と賜ふ何ぞ懇命ふ背くんや潘公大悦び頓  
 く造作と加へく坊猪圈と構へ數十の肥猪と畜ひ猪肉の店を開  
 き肉案子盆器の類も奇廉ふ用意く潘公年來の旧識あどん  
 も店開販の吹聴とあく置先吉日と擇で石秀此家ふ移り商賣  
 の備へ全く調りく最上吉辰に大吉利市と祝して発店せ  
 くの衆鄰舎潘公が知音知己揚雄が勤ふ摠機ある者まで若干  
 家より祝賀の積物等とあく遠近より新肉鋪と開帳と関り  
 來り求る人多く其後引續て高ひ殊に繁榮せく石秀も太  
 心と安んじ潘公揚雄らも心と傾け懇切と尽くくかくして兩  
 月あまると過るるに光陰迅速なる哉時とる初冬に移り楊妻と

更節ふ遇石秀一日早ふ起冬の新衣と着く五更の頃より外縣  
 不出く猪の買入くくるが彼此ふ求るも多弟三日目の黄昏前ふ  
 回り家と見ると鋪店と開くる躰もなう家内に入て見ると肉  
 案其外高賣の用具家財等まで多く收拾竈の辺まで何一品  
 もあく片付あつく石秀心中奇異少くく諺に云人千日の  
 好く花百日の紅あつたくと云あるが果して然りとて良久く  
 く沈吟し此意察し思ふに揚雄の我と兄弟の約と誓ひしこと  
 あまの忽ち我と疎んずりてもあつたが殊に公勢繁く家更と  
 顧る暇もあそ人あつく以て其妻必定我と嫌ふ所あつく  
 かく苗主の間ふ家財と收拾し我ふ家と出ようとの意と曉くし  
 るに疑ひあつ我己に此意と曉以上あゆ片時も此家にあつ

人や己に戴宗楊林の誘引う。直に此所と去。梁山泊入らんと  
 せし揚雄が懇切に暫く其義と止され。今斯る時宜し信人てい  
 潘公への故郷不歸らんことと辞す。是迄の懇志と厚謝ふ及ぶ梁  
 山泊に走らふ志ありと直ちに潘公が家に至つ。則ち潘公にま  
 へて云く。某故郷と出く六七年に及びしうども。未だ曾て帰  
 らば。此方人に明日早々別れと告ぐ。故郷に歸らんと欲ふ。潘公が  
 云汝必ずかくのてとて更と云ふ。我己に汝の心と察せり。汝の苗  
 守の内に家財と拾收するを見。斯云ふ。あらん。此更に於る。ハ  
 少々縁故あり。我女ハあづめ王押司と云人。嫁し。是も此人不  
 幸にして死せし。ゆゑ。今ま。揚雄不嫁せり。明日ハ則ち王押司の  
 三回忌に當るも。出家と請て法事と做んと。依て汝  
 の家と空く。供人らと入置人と。則ち家財等と收拾し。り  
 必も疑ひと休て。猶此所の逗留し。況や我齡七旬に及ん。く。  
 客に陪侍する。能ざる間。明日ハ足下。我不替つ。宜しく出家ら  
 と。歎待多。石秀が云實に然らば。我あ。苗り。や。人。とて。再家ハ  
 歸り。り。翌日石秀ハ門前に立出。僧の來る。を待居。る。處に  
 一人の年少。ある和尚。一人の道人と。從へ。る。や。門前。不。至。り。則ち石  
 秀に對して。問訊と。あ。それ。石秀急に。礼と。還して。内。に。誘引  
 し。頓。く。潘公と。呼出。し。彼和尚に。遇。し。り。され。彼和尚。先。潘公に  
 對して。云。く。ん。我。が。父。何。ゆ。多。久。し。く。寺。に。ハ。至。り。る。を。ぬ。や。潘公。が。云  
 我俗事繁多。ゆ。て。寸暇と。得。ざる。ゆ。多。多。日。寺。に。參詣。せ。ら。し。く  
 と。閑談。半。ある。所。に。彼。巧雲。風流。不。粧。と。樓。と。下。り。先。石秀。と。呼

竹編水滸書傳卷之四

て問うるへ和尚至りまひぬるや石秀が云一人年少ある和尚至れり  
 巧雲が云其和尚乃ち裴如海と云く我父を拜して義父と  
 多ひぬるゆゑ我為りも又義兄あり尤能經と念うる石秀此言を  
 聞て心中を疑しく思ひぬる彼巧雲己に出る和尚不遇され  
 べ石秀の暗に傍よりまを望み見るに彼和尚巧雲と見て合掌  
 問訊して云うるん賢妹恙あるや巧雲答て我常々師兄の事との  
 る渴想もいへんぞ消息とくまぬぬや和尚が云我頃日新の水陸堂  
 と建立しけるゆゑ賢妹と請て遊行せしめんと思へども節級  
 怪まらんとて恐ましく未だ賢妹と邀び巧雲が云我夫揚雄の曾  
 て拘束あらず我己に宿願もあまれば近日貴寺に参詣すべしと  
 互の意を會て談話しければ石秀是と見く暗に想道我常々

裴如海 巧雲

彼女と見るに多く風話と叙て心正しかりける果して  
 今此僧に私情と通せんと欲と覺ふ遮莫我必も義兄小替て事と  
 正人ゆゆの事と自ら牙と咬遂に簾と掲ぐ彼和尚の前ふ至りし  
 うば巧雲早くも和尚に對して云うる此人は是我夫揚雄が義弟  
 あり裴如海が云先ふも己に見えり未だ誰人なることと関ざ  
 りし揚雄居士の義弟とやあは高姓大名のうら石秀が云り  
 姓は石名は秀と号は我専ら人の為に力と出し我身の禍と避る  
 ゆゑ人皆拚命三郎と綽号せり和尚よく我を識認る裴如海  
 是と関て心中頗る怕る則ち巧雲に對して云うる我はも諸の僧  
 衆と請て來るべき間暫く相待多人として己に門外に出れば巧雲  
 又樓上に登りしる石秀の弥心中に疑ひ自ら門辺にあつて待てる裴



如海頓く衆僧と引く來りしを潘公石秀あまこと迎て丹に入り茶  
 己に了讀經肇りくる處に彼巧雲冥前に出て自ら香と拈り三拜  
 とあぐれば裴如海ハ只顧巧雲と望見く愍心大に乱るる石秀  
 傍に在る此光景と看心中甚ど冷笑ひくる須臾やと念經  
 も了り衆僧皆座ふ就て齋食と吃し遂に潘公石秀に別れを告  
 歸りし處に独り裴如海ハ後に遁りて暗に巧雲と戯弄とあし  
 遂に私情と通じくるまば石秀壁の縫間よりあまこと伺見自ら嘆  
 息して想道我が義兄揚雄ハ誠に正しき豪傑あつた此のとき淫  
 婦と聚りまひし何の不幸うあまこふ過んやと己に刀と抜て  
 兩人の者と殺さんと欲しくるが又心中に想ひくる我今揚雄不知  
 らせずして彼ら二人と殺さば必定事分明あらずして我ら罪や

遂謀膠  
 賢弟  
 怪問

あつて今日ハ先あまこと忍びく重く殺すも晩くして空  
 しく刀と鞘に收めく扣へくる彼巧雲ハ此日と始して裴如海ハ  
 心と傾け毎度會合して私情と交へ恰も謀と膠のどく一日  
 石秀揚雄と訪ひたれば揚雄則ち石秀と迎て云くる我専ら公  
 用の絆らま久しく賢弟と酒と酌ざりし今日ハ幸ひ閑暇と  
 得て寂寞ある間去來酒樓の上つて三盃と酌んとて遂に石秀  
 引く家と出直ちに一軒の酒店ふ至つて樓に上り頃て酒肉と求  
 て石秀に勧めくる石秀ハ只頭と低て悦ぶ色ありしを揚雄あ  
 まこと怪問くる賢弟何がゆゑふ斯頭と低て沈吟するや恐らく  
 ハ家内の男女賢弟と欺くるの因くあまこと憤るふあらずや石秀  
 が云家内の男女曾て我と欺守我今長兄の厚恩と蒙りしゆゑ

一句の言と長兄に告んと欲ほあへく是と云べきや、揚雄が云賢弟  
 の一告んと思ふてあへく速に語るべし何ぞ必ずしも沈吟するや  
 石秀が云長兄の毎日官府に出く内に居るらざる由も家内の悪事  
 と知りあふまじ、長兄の妻巧雲の原正と賢女にあはるべし我毎度不  
 義の事と看まればも便機と得て長兄に告んと思ひ延引今日の  
 及べり揚雄が云我常の他出でて家内の事ハ総くあはるとまじ、  
 汝且く不義の對手と告よ石秀が云向に巧雲親潘公の家にて  
 先夫の法事と做し時彼裴如海と私情と通じ此より裴如海毎  
 度長兄の家に忍び入るとあへかかるとき淫婦と苗て何の益あ  
 りん長兄明らるの曉くも揚雄関もあへく大に怒り云此淫婦い  
 るぞかこのごとく我と欺や我是と親とずんば有べうすとして怒り顔色変  
 じられバ石秀諫て云長兄先怒りと息まひて今晚何事も云  
 らまは唯常のごとくいひてあへく明曉の詐て當直くよく  
 と云まひて家と出る然らば彼悪僧必然來るべし某の後門不待  
 べき間長兄ハ又三更の時分ろくび回り前門と敲り此音と聞か  
 ら彼僧急の後門より逃出べし此時某あまを捉人小何の難きこと  
 ありん揚雄此言と聞くと可ありと同日遂に酒樓と下りて街の  
 出く

○揚雄酔て潘巧雲と罵

斯る形に四五人の下官きろく揚雄不對して云く今知府相公  
 花園の内に出るひく鎗棒と見まらんとのことあるに節級早く  
 來て某らこののの一棒と使ひま揚雄あまを聞て則石秀の向て

我われ先まづ官府くわんぷ小趣人せうしゆじん汝なんぢ宜よろしく家いへに歸かへるべしとて遂つひに下官げくわんらと共とも  
 に知府ちふが後園ごえんに至いたりて捧たと使つかひしるが知府ちふあまこと見みる大おほに悦よろこび  
 頓とんく酒さけと以もつて揚雄やうゆうと賞しょうしるるに揚雄やうゆう一連いつれんに五七碗ごしちわんの酒さけと飲のみて  
 大おほひに爛醉らんざいし黄昏くわんごんに及およぶ家いへに歸かへりしるが妻つまもづる揚雄やうゆうと助すけ  
 け床とこの上うへに上のぼらせしるる形かたちに揚雄やうゆう妻つまが面おもてと見みる忽とち怒いり心頭しんとうよ  
 り起たり則すなはち妻つまと指さざり大おほに罵ののちて云いふ汝なんぢ淫婦いんぷ我われ必かなく汝なんぢを殺ころすべし  
 ぞ妻つまあまを閉とり甚とど怕おそま敢あて声こゑも作あす傍かたわら臥ふたり漸しだに五更ごごう  
 の時とき不至いたり揚雄やうゆう絶つて醉ま醒さしるる則すなはち妻つまと呼よび水みづと求もとむる處ところに妻つま  
 頓とんく水みづと携たりて与たまへられ揚雄やうゆうあまを取とり云いふ我われ宵よの大おほに醉ま  
 しるる由よし急いそぎ定さだめて汝なんぢと責とがめしるるもあま必かなくあまを恨にくむと勿なし  
 彼巧雲あなづかが云いふ丈夫ちゆうぶ常つねに醉まるる時ときハ早速さつそく歌うたをうたひに今宵こんやハ何なにゆゑに  
 や我われと責とがめしるるひ詞ことばの末すえ何なにとやん心こゝろと安やすんべしと揚雄やうゆう  
 云いふ汝なんぢ必かなく心こゝろと煩わづらひとあまを責とがめしるる常つねの躰たふりてあま必かなくも  
 怒色いかでかあがりしるる暫しばしとて云いふ我われ義弟ぎてい石秀せきしゆハ頃日ころひ扶たすけしるる  
 してありしるるに汝なんぢよろよろ酒肉しゆにくと具もつへ彼かれと慰なぐさめしるるや巧雲あなづかあまを  
 閉とりて忽とち涙なみだと洒しるる揚雄やうゆう問とひしるる汝なんぢ流涕りゅうていするしるる我われ宵  
 に汝なんぢと責とがめしるる原本もと心こゝろふあま都みやこて酒さけ與よふ衆しゆじての事ことあり必かなく  
 再三さんさん是これと恨にくむと勿なし巧雲あなづか涙なみだと掩おほへて云いふ我われ父母ふぼ初はじめ我われと王  
 押司おし小嫁こよめせしるる處ところに王押司おうおし不ふ幸しあやとて早速さつそくありしるる今いま再  
 び丈夫ちゆうぶ小嫁こよめし我われ心こゝろ大おほに悦よろこべし思おもへども丈夫ちゆうぶハ却かへりて我われと他人たにんふ欺  
 しるる是これ則すなはち我われと愛あいしるるぬふ因より揚雄やうゆうが云いふ誰たれ人ひと敢あて汝  
 と欺あざむや汝なんぢ速すみにあまを語かたむ巧雲あなづかが云いふ我われゆゑ云いふまふきと思おもへ共

我われ先まづ官府くわんぷ小趣人せうしゆじん汝なんぢ宜よろしく家いへに歸かへるべしとて遂つひに下官げくわんらと共とも  
 に知府ちふが後園ごえんに至いたりて捧たと使つかひしるが知府ちふあまこと見みる大おほに悦よろこび  
 頓とんく酒さけと以もつて揚雄やうゆうと賞しょうしるるに揚雄やうゆう一連いつれんに五七碗ごしちわんの酒さけと飲のみて  
 大おほひに爛醉らんざいし黄昏くわんごんに及およぶ家いへに歸かへりしるが妻つまもづる揚雄やうゆうと助すけ  
 け床とこの上うへに上のぼらせしるる形かたちに揚雄やうゆう妻つまが面おもてと見みる忽とち怒いり心頭しんとうよ  
 り起たり則すなはち妻つまと指さざり大おほに罵ののちて云いふ汝なんぢ淫婦いんぷ我われ必かなく汝なんぢを殺ころすべし  
 ぞ妻つまあまを閉とり甚とど怕おそま敢あて声こゑも作あす傍かたわら臥ふたり漸しだに五更ごごう  
 の時とき不至いたり揚雄やうゆう絶つて醉ま醒さしるる則すなはち妻つまと呼よび水みづと求もとむる處ところに妻つま  
 頓とんく水みづと携たりて与たまへられ揚雄やうゆうあまを取とり云いふ我われ宵よの大おほに醉ま  
 しるる由よし急いそぎ定さだめて汝なんぢと責とがめしるるもあま必かなくあまを恨にくむと勿なし  
 彼巧雲あなづかが云いふ丈夫ちゆうぶ常つねに醉まるる時ときハ早速さつそく歌うたをうたひに今宵こんやハ何なにゆゑに  
 や我われと責とがめしるるひ詞ことばの末すえ何なにとやん心こゝろと安やすんべしと揚雄やうゆう  
 云いふ汝なんぢ必かなく心こゝろと煩わづらひとあまを責とがめしるる常つねの躰たふりてあま必かなくも  
 怒色いかでかあがりしるる暫しばしとて云いふ我われ義弟ぎてい石秀せきしゆハ頃日ころひ扶たすけしるる  
 してありしるるに汝なんぢよろよろ酒肉しゆにくと具もつへ彼かれと慰なぐさめしるるや巧雲あなづかあまを  
 閉とりて忽とち涙なみだと洒しるる揚雄やうゆう問とひしるる汝なんぢ流涕りゅうていするしるる我われ宵  
 に汝なんぢと責とがめしるる原本もと心こゝろふあま都みやこて酒さけ與よふ衆しゆじての事ことあり必かなく  
 再三さんさん是これと恨にくむと勿なし巧雲あなづか涙なみだと掩おほへて云いふ我われ父母ふぼ初はじめ我われと王  
 押司おし小嫁こよめせしるる處ところに王押司おうおし不ふ幸しあやとて早速さつそくありしるる今いま再  
 び丈夫ちゆうぶ小嫁こよめし我われ心こゝろ大おほに悦よろこべし思おもへども丈夫ちゆうぶハ却かへりて我われと他人たにんふ欺  
 しるる是これ則すなはち我われと愛あいしるるぬふ因より揚雄やうゆうが云いふ誰たれ人ひと敢あて汝  
 と欺あざむや汝なんぢ速すみにあまを語かたむ巧雲あなづかが云いふ我われゆゑ云いふまふきと思おもへ共

石秀  
奇巧雲如海  
談話

行編大奇書傳元



寒紗入清畫傳卷之四

大夫却て彼が為に哄喃きまゝ人ともあつてくれれば我今あまこと告  
 人必む十分に怒て事と破りまゝとあつて彼石秀初め來し時  
 の老實やして肆あるともあつて頃日己に志驕り丈夫の  
 苗守ある時一向我不戯も不義の言と云ぬまゝも我曾て心上に  
 掛ひて忍びろるに此兩日の頻りに我と欺くあのゆゑに今丈夫  
 に告知せや間向後必む彼と憐れまゝへうらぶ揚雄是と閉て心  
 中大ふ怒り彼己に是らの不義と做んと思ひ却て裴如海がとと  
 詐て預れぬ我と誑きぬるし甚ど以て悪むべしと再三憤りし  
 妻に對していそぐ彼己に此のどと不仁不義の者あつて早速家  
 と追出すべし汝心と安んぜよと翌日潘公に告ぐ石秀が家の  
 道具等悉く打碎て棄しあされば石秀の原來聰明の者あまは

ちや是と察し思ひろる昨夜揚雄酒不酔る我云しこと妻がま  
 しく漏し却て妻に誑きぬるふ疑ひあり我且速に退て別に宜し  
 き計とあまんとて包袱と背に負て家と出則ち潘公に別れと  
 告て云くわ我久しく此所にあつて深く懇情と蒙り誠小感  
 激に勝ずと遂に辞し門外の馳出則ち近辺に旅宿と求めて休  
 息し自心中に思ひろる揚雄我と義と結て兄弟の盟とを  
 くるに若今日此等のことと分明に正さずんば必竟我独不義小陷  
 り天下の豪傑ふ笑ゆるべし且揚雄も又淫婦の毒殺小遇ん  
 へ眼前あり揚雄今淫婦が言と信じ我と恨るを深く我縦ひ  
 つらうの分説するとも我言信すまう彼若赤心と識るものあまは  
 己が心魂大丈夫あつてと愧べきものへ今我宜しく証見と求

て此ことと分明あらしめんとて翌日揚雄が當直の夜と伺ひ知  
其夜四更の時分旅宿と立出たり

○石秀智とゆつゝ裴如海と殺

石秀へ中夜より旅宿と出暗に揚雄が後門の辺に躲れ裴如海  
が出るを待ひひて在るる漸五更の左側ふ至つゝ一人の頭陀手  
の木魚と持後門の外に出る左右と窺ひ見ると石秀忙しく  
走り倚り彼頭陀と捕へ則ち低言罵つゝ云々云々汝若声を高  
むるはとあはれ我今汝と殺すんきぞ汝若命惜くば裴如海が悪  
と一々詳に我ふ告べ一命と饒さん彼頭陀慄き抖て云々云々汝肯  
て我と害せずんぞ一点も詐も備細に語らん石秀が云己に  
んふ我のよく汝と饒さん速に告知らせより少くも偽る事あら

べ必むと頭と刎べきぞ彼頭陀が云如海和尚今専ら揚雄が妻と私  
情と通じ毎度此家に忍ひ入る擅に娯とあす少刻回らんと欲す  
るも多に我門外に出る四方の動静と窺ふ是則ち實情あり石秀  
又問て云裴如海へ今何もの所ふありや頭陀が云彼尚床の上り  
歇ある此更原我一人の下女と我外の消息と窺ふ彼ら兩人が  
こと助るゆゑ彼男女毎度安心して斯優に歇む我今此木魚と敲  
て響するときんば彼早速出來る是又我輩が相圖あり石秀が云  
我先汝が衣服と木魚とと借へんとて頓ち衣裳と剝取遂に刀と接  
て頭陀と斬殺し彼木魚と取て只顧敲く裴如海此響を聞  
時分へ好そと心得則ち後門より走り出る處に石秀早くもま  
まと捉へ暗に低言罵て云々云々汝必むと声と高むるはとあはれ若敢

て声と揚べ我今汝と殺る速に衣裳と脱で我ふ子よ。裴如海己  
の石秀とるごとと知りし。豈敢て声と做人や。則衣裳と脱で石  
秀ふ子よ。石秀あまを取て己が身ふ着し。己に又刀と揮て裴如海  
頭と刎急ぎ旅宿ふ回し。暗ふ門と開き。再び房間の内に入て啓  
く。茲に又當地の城中に糕粥と賣て營とす。王公と云者あり。  
く。此時分一擔の糕粥と荷て高賣ふ出ま。此所ふ至く裴如  
海が屍と踏で真倒に倒し。あま何人ありあやと。手と伸く探り見  
ぬ。二人の僧斬殺されてありし。王公忽ち大に駭き。声とあげ呼り  
く。隣家の者どもあまを聞各門と開き馳出る。死人と王  
公と倒しあり。まは衆皆大に駭き。先王公と捉へ官府ふ引渡さん  
と。一同ふ駭く。死人とも見届け。王公と抱り。蕪州府に至り

し。知府則ち廳上に出く其訴と聞に諸隣家皆指の下に跪く  
此王公と者今朝某らう門前に在く喊びし。面々悉く出く  
あまを見し。一荷糕粥地上に澆翻。其傍に兩個の死人あり。一人は  
和尚一人は頭陀。各身に衣服と着せ。頭は刎落され。其側に又一挺  
の刀あり。此まは王公と揪へ。訟へ奉る。王公も又告て云某毎日糕  
粥と賣く營とす。常六五更過の時分より出たま。と賣ふ處に  
今朝例より些早く出し。由急路も。見分ぐ。一向走り  
行く處に不図踢跌て地上に倒し。一荷の糕粥悉く澆翻る。あま  
驚き。地上を見く。兩個の死人あり。恐懼の餘り。覺ず声  
と揚て呼り。處に諸の隣家出て遂に某と揪へ。唯闇くして跌  
倒し。のこり。死人のこへ何ゆ。何人誰ふ殺され。や。更に知る所

置道則

あし。伏して願く相公明ふまこと察し多く知府あまこと関てまづ  
 王公と楷の下に置置則役人等と馳て死人と檢驗させたる處ふ頓  
 て立飯て報じくるへ二人共ふ報恩寺の僧あり。各頭と勿落され傍  
 に一挺の刀あると持参せり。あまこと知府に献せり。知府あまこと見  
 て則當番の孔目對して。評議と求めし。孔目告て云此兩僧ハ  
 原同寺の僧あり。彼所に於て殺されし。必定道ありぬとて做出し。  
 兩人殺死ふ及びし。あまこと。王公實に是と知るまづ。二人の死人縁故  
 あんきとあまこと。今急に糾明せん手掛りもあし。王公と免し隣  
 家共と回らし。ゆるまづ。知府然りと同く王公に構め。諸隣家の  
 訟へ閑置く皆引取し。此丁専ら沙汰ある程に彼淫婦巧雲も  
 あまこと関大駭き。只心中の苦々々。此時揚雄も己れ次第と関

暗ふ想ぐる。是必定石秀が所為ありべし。我前日誤て彼を恨くる  
 ゆゑ彼証見と看せし。めんが為兩人の僧と殺しつゝ。我先彼に  
 遇。この虚實と問んとて。遂に街の辺に出る處に背後ふ人あ  
 つ。長兄何まに行まふやと呼りし。揚雄急に頭を回して其人  
 と。この是則ち石秀あり。揚雄が云我賢弟と尋んと欲し。ま共  
 何まの所ふ在と知らび。甚ど是と憂ひぬ。石秀が云長兄先我旅  
 宿ふ至つ。談話し。ま。遂に導て旅宿に至り。則ち告く云某が  
 云。一と偽ありや。揚雄が云我前夜酒後ふ不図言と洩し。却て淫婦  
 ふ再び誑ま。賢弟と恨ぬ。此ゆゑ我今日汝と尋ね遇て罪と謝せ  
 んと思ひしあり。望らる賢弟怒りと息我が過りを免さんや。石秀う  
 云某不才の小人。う。願う道理と曉し。ゆるぬ。うんぞ敢て



長兄に違はんや。某初め長兄に告ぐる。後々へ長兄淫婦が毒殺り  
 遇ひるらん。然らば天下の豪傑ハ大丈夫の名と赦すまじ。我々も  
 兄弟の義と結あぐら。長兄と人の笑ひのりさうしむるへ願ふ忍びざ  
 る形あつて實義不依く密に悪吏と告ぬ。然るども我亦心長兄を通  
 じぐさき所あるゆゑ我遂に裴如海と頭陀とと殺せり。長兄是と見  
 て速に疑と解るへとて。則ち衣裳と取出し見せ。是ハ則ち兩僧が着  
 しくる衣裳あり。我是と証見ふせん為剝取く置くるを尊覧し  
 呈に。我一旦兄弟の義と結で。我首今飛とも盟約に差ふとせ。  
 揚雄愧入。賢弟必と我と恨るにあらむ。我今更面目と失あひて。  
 賢弟に述ん言もあしとて。又一しびハ大に怒り。我今宵娼婦と殺し  
 賢弟に見せしめん。と云時石秀阿々と笑ひ。長兄ハ官司の法度も知

り多ひつらん。何ゆゑ此らのことと云ふや。古より淫婦と殺すハ先  
 奸夫と捉へ然して後よしと殺す。彼奸夫裴如海ハ己に我是  
 と殺せし。長兄今又誰と奸夫とて。淫婦と殺し。ふや。是乃ち  
 証見もあしとあま。若卒尔に淫婦と殺し。却て人殺しと  
 成て大ひある禍と蒙り。ふとあらん。あう。我議ふ徒ひる。淫  
 婦と殺し。ふとも。十分禍あら。揚雄が云賢弟何等の計有。禍  
 と免れ。むらや。我が為に委。告ひへとヤ。石秀何の各と  
 あすや。五篇目と讀む明あるべし。  
 論者つ。戴宗公孫勝と求得。飲馬川の山陣の三頭領と誘引  
 し。揚林と共に梁山泊ふ上るとありて。晁蓋宋江ハ公孫勝と尋得。告  
 き旨。且又揚林。裴宜。鄧飛。孟康四人の豪傑ふ遇て伴ひ。次第と告

新編 清書 伴名之目

七〇

て諸の豪傑まで對面せしむることを書べきこと作者あまを落せし  
 間此次ふ至る梁山泊鉄面孔目裴宜と立ち軍政司とす云又宋江  
 祝家莊と攻る備に揚林鄧飛あどの名出されは是ら皆以前より梁  
 山泊に在る人のごとく又前の編武大郎武松の段に武大郎が妻潘金  
 蓮武松ふ恋慕し忽ち武松に羞辱らま却て夫の苗主に武松我ふ戲弄  
 とあせりと武大郎へ訴へ此卷の揚雄が妻潘巧雲夫の苗主に石秀乃  
 我に戲弄とあせりと揚雄ふ告奸夫と需る淫婦此詞を以て夫と誑  
 く定例のごとく外六ユ夫も思慮もあまのふや

新編水滸畫傳卷之四拾

和漢 書 竹 藉 賣 捌 處  
 西洋

大阪心齋橋博勞町角

群玉堂河内屋 岡田茂兵衛

